

あいさつの輪を広げよう

せたな町立若松小学校 佐々木 朗

「おはようございます。」毎朝、玄関で子どもたちを迎える。本校は、全校児童が11名という小規模校ということもあり、大きな声であいさつをしたり、人前で大きな声で発表するのがどちらかというと苦手な子が多い。校長先生の指導もあり春からずっと、全員の子どもをあいさつとともに迎えることにしている。小さな実践ではあるが、「継続は力」というか、子どもたちのあいさつの声も少しずつ大きくなってきた。地域の方に「子どもたち、最近きちんとあいさつするねえ。」などという言葉をいただくと、やはりうれしい。

せたな町教育委員会では、「みんなで明るいあいさつ・元気なあいさつ」の標語を募集している。子どもたちと、あいさつのことを考えるいい機会としていくと共に、私のあいさつの実践について振り返ってみる。

私は、4年前、現職派遣で大学院へ2年間通った。二十余年ぶりの母校である。私が気になったのは、学生が先生方にあまりあいさつをしていないということである。先生が通ったらせめて会釈ぐらいするのが常識と思い、ちょっと残念に思った。それで、私は小さな試みであるが、自分からどんどんあいさつをしていくことにした。廊下ですれちがう全ての学生たち、先生方に、「おはようございます。」「こんにちは。」「お疲れ様でした。」と声をかけた。最初は、「なあに、このへんなおじさん？」っていう目をしている学生（先生）たちからも、しだいにあいさつが返ってくるようになった。そうしているうちに、廊下ですれ違うだけの学生とも会話をするようになったし、たくさんの先生方の部屋にもあそびに行くようになった。

今、多くの企業では、新人研修で徹底的にあいさつのしかたをたたき込まれる。しかし、私自身の経験からすると、そのような研修は受けていない。これから、社会に出る、そして中には教員になる学生たちである。私は風変わりな学生ではあったが、大学にちょっとした新しい風が吹いてくれ、あいさつの快さを感じてくれたとしたら嬉しい。

私が思うに、子どもたちは、一般的にあいさつが苦手、もっと広くいうならば、人間関係を築いていくのが苦手であるという傾向が伺える。その一方、あいさつは円滑な人間関係を築いていく第一歩である。特に私を含めて教職にある者は、率先して、子どもたちに、そして地域にあいさつをして、「あいさつの輪」を広げていくことが大切だと考える。大学でも小さかったかもしれないが、あいさつの輪は広がった。そして、今、地域や学校でもあいさつの輪が広がりつつある。わたしは、これからも、明るく、元気なあいさつを心がけ、この輪を広げていきたい。